

再飲酒を繰り返したアルコール依存症者への回復へ向けた支援

○公認心理師 A 精神保健福祉士 A
医療法人耕仁会札幌太田病院 1階デイナイトケア課

【はじめに】

当院ではアルコール依存症(以下AL依存症)の回復支援のため、デイケアや家族会、木曜断酒会、自助グループなどを実施している。再飲酒を繰り返しつつも、これらを活用し再断酒、そして断酒の継続に至った症例を報告する。

【症例提示】

A氏、30代男性。AL依存症。習慣的に晩酌していたが、仕事量が増えていくにつれ次第に酒量が増加していった。次第に欠勤や遅刻を繰り返すようになりB病院へ入院。退院後は半年程断酒していたが再飲酒、抑うつ気分や意欲低下、不眠が現れ休職した。その後両親と同居しつつ当院で外来通院していたが、断酒に至らず当院入院となった。

【治療経過】

退院後は1階デイケアへ通所を開始。当初は運動系のプログラムに関心を示し参加を継続していた。断酒も続いていたが、退院から半年後に再飲酒を繰り返すようになった。デイケアへの来所がなかった際は職員から架電し、飲酒状況や体調を尋ね、よほど体調が悪い時でなければデイケアへ来所された。その際にA氏の母にも連絡を取り、情報交換を行った。また、心理教育プログラムにも参加を促し、アサーショントレーニング、認知行動療法などの参加にも繋げることができた。飲酒欲求が出たときは「マインドfulnessを使って乗り切った」との発言もあった。断酒会へは自宅からオンラインで参加し、正直にスリッパの事実を話していた。

これらの支援を継続する中で、約2ヶ月続いていた飲酒が止まった。再び断酒に臨もうと思ったきっかけについて、「飲酒し体調不良となっている中プログラムに参加し、思うように動けず、飲酒することでやりたいことができなくなっていると実感した」と語る。断酒継続の要因については、当初デイケアへ通う目的であった社会復帰を目指しているためと語っている。加えて、飲酒していた時期に面談も行い、A氏は満足度リストに「家族を断酒できていたころのように安心させたい」とも記入していた。

また、A氏入院中から現在まで母は家族会へ継続的に参加されている。家族会に参加することで「困っている面を共有し他の参加者からアドバイスを得られた」「自分も元気になる」と語られた。デイケア職員からの情報共有に関しては、「A氏の状況がわかりA氏への対応が軟化した」という言葉もあった。

【考察】

A氏の飲酒が続きデイケアから足が遠のいていた時は職員からコンタクトを取り、支持的な姿勢を取りながら再断酒の動機づけを行っていた。デイケアへの来所がなくても、関係性を継続していくことで、断酒のきっかけを掴めるかもしれない。

本症例はデイケアや断酒会、家族会など複合的に活用したことで断酒に繋がったと考えられる。また、AL依存症者の家族がアルコール問題に対処できるようになるために、心理面へのサポートが重要であることが指摘されている。しかし、家族への支援が本人にもたらした効果についてA氏から直接語られず、今後の検討課題であるといえる。